

「外でちょっと立ち話をする相手」が近所にいる人の特徴

公益財団法人ダイヤ高齢社会研究財団
澤岡 詩野

1. 「外でちょっと立ち話」が大事なワケ

外出行動に制約が加わったコロナ禍は、公共交通機関を使わなければ会えないような相手と没交渉になる高齢者も少なくない。そもそも、身体的な自立度が低下傾向にある高齢期は、加齢に伴い外出行動半径が狭まり、交流も減少していくことが知られている。

コロナ禍はもとより、加齢により孤立化しないために重要になってくるのが徒歩圏や自転車圏、「近隣」や「近所」といった場で交流する相手の存在といえる。しかし既存研究では、これらの相手とは「あいさつ程度でよい」と答える高齢者が多くを占めることが明らかにされている。なかでも配偶者や職場など一部の人としか関係を保持していない高齢男性は、近隣や近所に多様で多くの交友関係を持つ高齢女性よりも、あいさつ程度のほどよい距離感を近所との付き合いに求めることが考えられる。

高齢男性、特に都市部の企業退職者にとって、地域社会のなかで「あいさつ+α」のゆるやかなつながりを増やしていくことは、孤立化抑止を考えるうえで大きなポイントとなっているといえる。本稿では、手助けなど手段的サポートや相談などの情緒的なサポートといった親密さを前提にした付き合い方ではなく、あいさつの次に生まれるであろう「外でちょっと立ち話をするくらいの交流」に着目する。具体的には、男女別に、「ふだん、近所の人とは、どのような付き合いをしているか？（問2 複数回答）」の設問に対し「外でちょっと立ち話をする」と回答した人の特徴を明らかにする。

2. 高齢者の近所との付き合い方の「リアル」

最初に、近所との付き合い方について複数回答で尋ねた8項目について、男女別に傾向を概観していく（表1）。「会えば挨拶をする」を選択した人は80%以上を占め、この割合に男女で有意な差は認められなかった。この結果は、「会えば挨拶をする」程度の関係性すらも近所にもたない、地域社会から完全に埋没している高齢者が、男女に関係なく15%以上も存在しているとも言え換えられる。次いで多かったのが「外でちょっと立ち話をする」で、男性（47.9%）よりも女性（62.6%）で多かった。

コンパニオンシップと呼ばれる「お茶や食事を一緒にする」と「趣味をともにする」については、共に行う行動によって異なる傾向が認められた。お喋りが目的となることの多い「お茶や食事を一緒にする」については男性よりも女性で多く選択されていたが、興味関心を共有する「趣味をともにする」は男女で差が認められなかった。

次に近所とのサポートの授受についてみていく。負担の大きさから家族や専門サービスが選択されることの多い「病気の時に助け合う」や「家事やちょっとした用事をしたり、してもらったりする」といった付き合い方を近所としている人は男女ともに僅かであった。しかし、距離的近接性に裏打ちされた気安さからか、「物をあげたりもらったりする」については「外でちょっと立ち話をする」と同程度にやり取りが行われていた。男性よりも女性でやり取りしている人が多く、これらは既存研究や調査と同様の結果といえる。

表1 男女別にみた近所との付き合い方			
	男性	女性	
会えば挨拶をする:	84.3%	82.8%	
外でちょっと立ち話をする:	47.9%	62.6%	**
コンパニオンシップ:			
お茶や食事を一緒にする	9.3%	21.9%	**
趣味をともにする	13.1%	14.2%	
情緒的サポート:			
相談したり, 相談されたりする	16.1%	21.9%	**
手段的サポート:			
物をあげたりもらったりする	42.9%	53.2%	**
家事やちょっとした用事をしたり, してもらったりする	6.6%	6.7%	
病気の時に助け合う	5.1%	8.0%	**
*p < 0.05 **p < 0.01			

ここからは最もゆるやかな交流と位置づけられる「会えば挨拶をする」に着目し、「外でちょっと立ち話をする」「お茶や食事を一緒にする」「趣味をともにする」「物をあげたりもらったりする」の関係性を概観していく（表2）。女性では、「会えば挨拶をする」人の方が近所と「外でちょっと立ち話をする」と回答していたが、男性ではこの割合に有意な差は認められなかった。コンパニオンシップに関する「お茶や食事を一緒にする」「趣味をともにする」については、「会えば挨拶をする」人の方が、お茶や食事を一緒にし、趣味をともにしていることが予測されたが、男女ともに有意な関係性が認められなかった。サポートに関する「物をあげたりもらったりする」については「外でちょっと立ち話をする」と同様に、女性では「会えば挨拶をする」人の方が「物をあげたりもらったりする」と回答し、男性では有意な差が認められなかった。

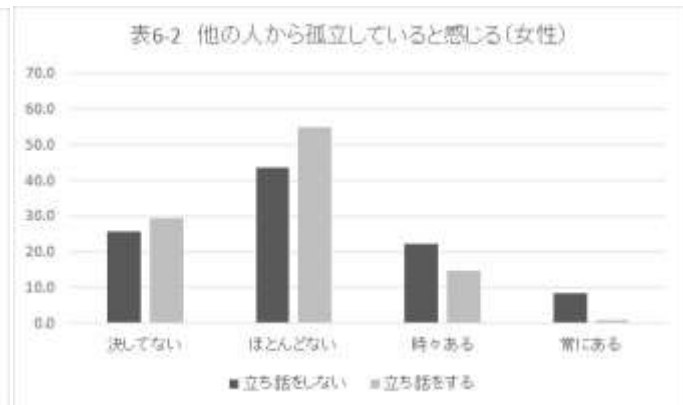
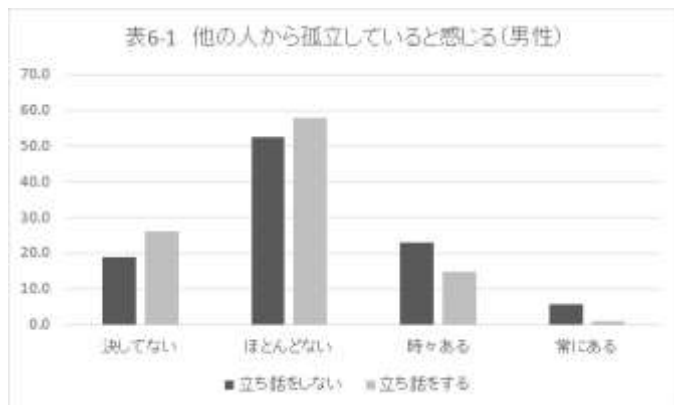
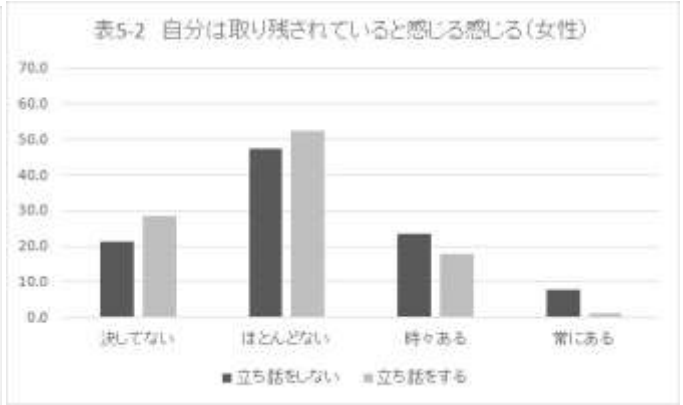
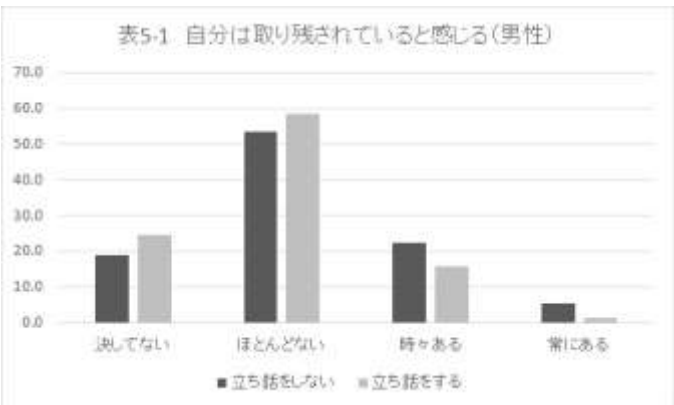
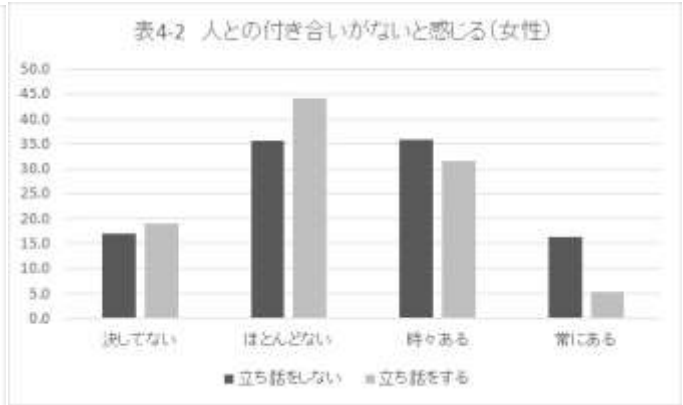
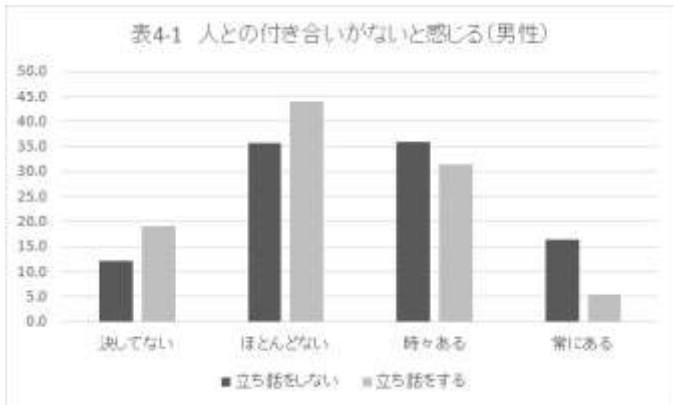
表2 「会えばあいさつする」との関係					
		外でちょっと立ち話をする	お茶や食事を一緒にする	趣味をともにする	物をあげたりもらったり
男性	挨拶しない	43.9%	10.7%	15.5%	43.3%
	挨拶する	48.7%	9.0%	12.7%	42.9%
女性	挨拶しない	45.3%	17.3%	12.6%	39.3%
	挨拶する	66.1%	22.8%	14.5%	56.1%

次に「外でちょっと立ち話をする」に着目し、「お茶や食事を一緒にする」「趣味をともにする」「物をあげたりもらったりする」との関係性をみていく（表3）。いずれの項目についても有意な差が認められ、「外でちょっと立ち話をする」人の方が近所とそれらのお付き合いをしていた。この傾向は男女に共通して認められた。

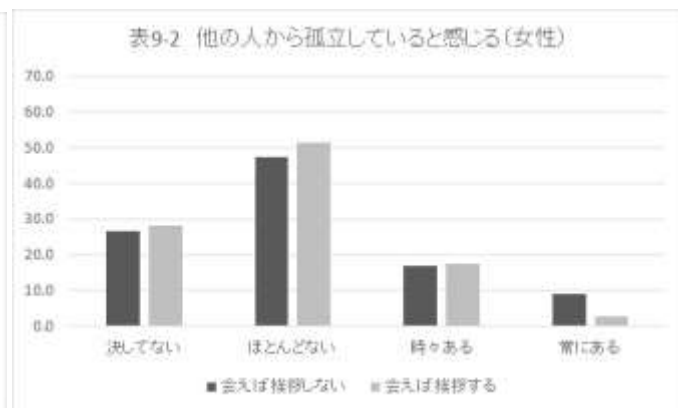
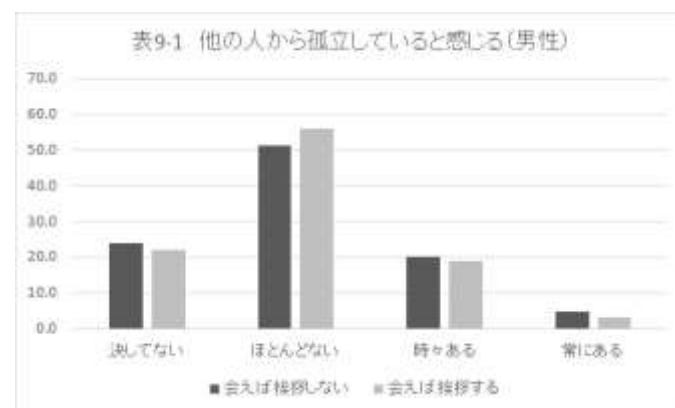
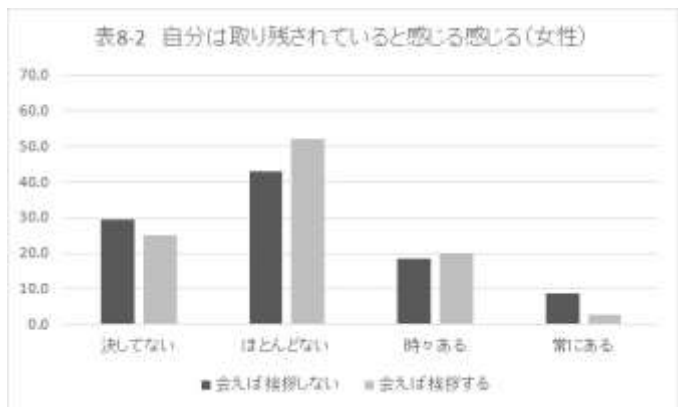
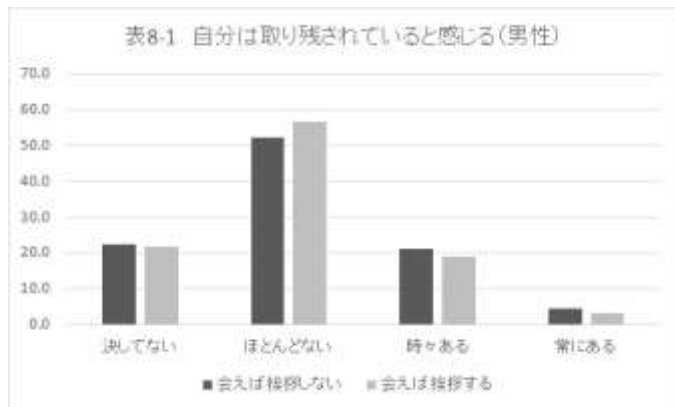
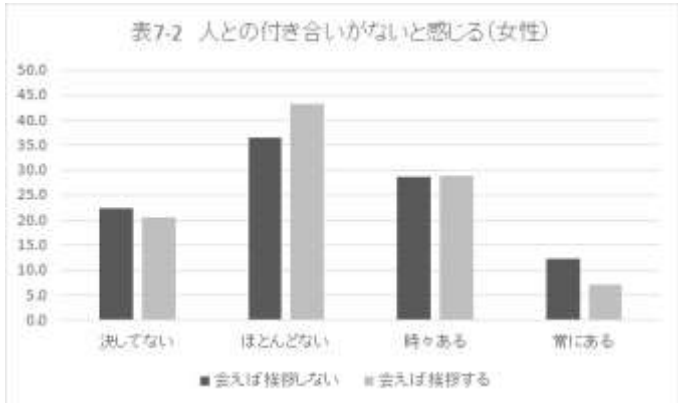
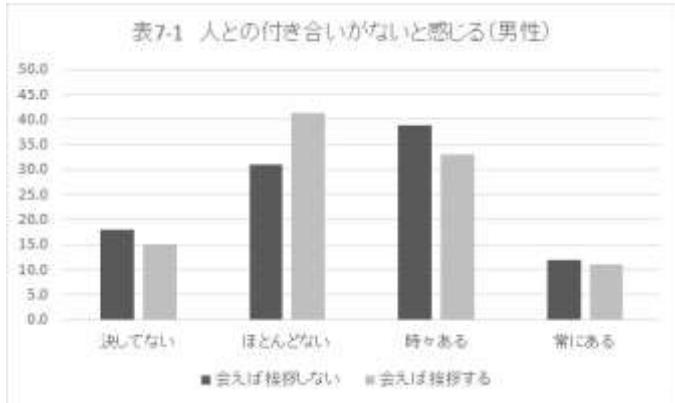
表3 「外でちょっと立ち話をする」との関係				
		お茶や食事を一緒にする	趣味をともにする	物をあげたりもらったり
男性	立ち話をしない	6.6%	9.9%	26.3%
	立ち話をする	12.1%	16.7%	61.0%
女性	立ち話をしない	13.9%	7.5%	26.1%
	立ち話をする	26.7%	18.2%	69.5%

3. 「外でちょっと立ち話をする」ことの効用

「外でちょっと立ち話をする」人のいることの効用を検討するために、孤独感に関する3項目（問42）「自分には人との付き合いがないと感ずることがある」「自分は取り残されていると感ずることがある」「自分は他の人たちから孤立していると感じることがある」それぞれとの関係性を概観していく（表4-1～表6-2）。孤独感に関する3項目すべてで有意な差が認められ、「外でちょっと立ち話をする」人の方が総じて孤独感も低かった。この傾向は男女で共通して認められた。

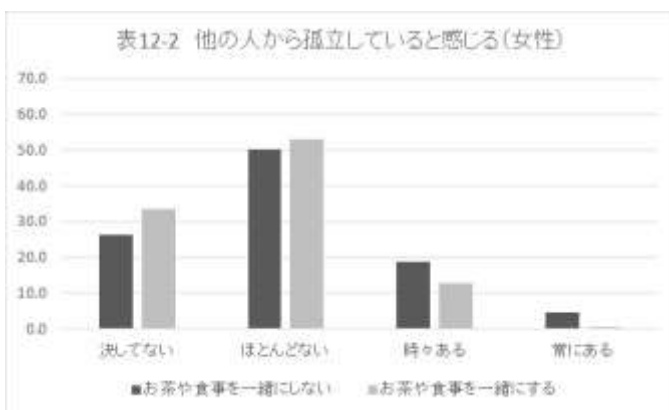
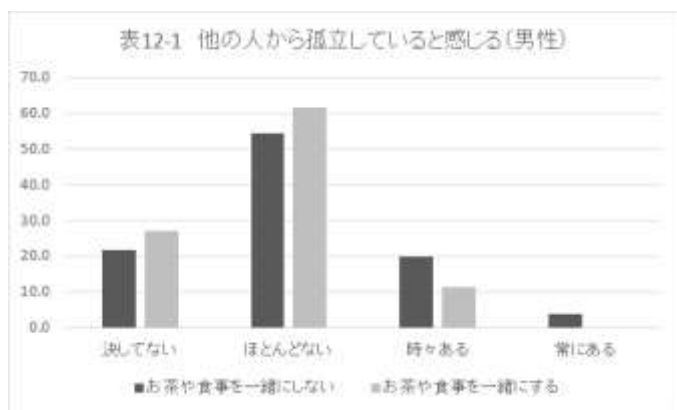
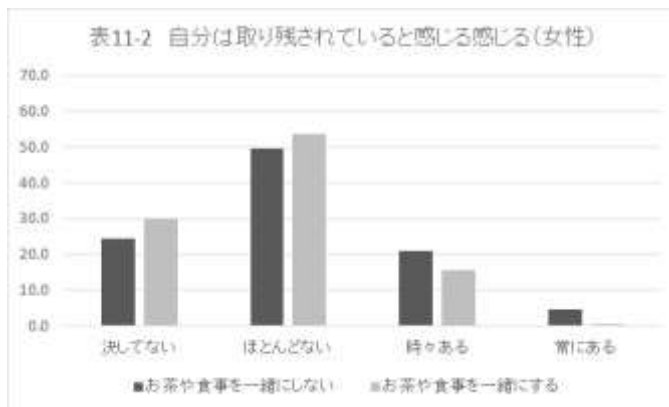
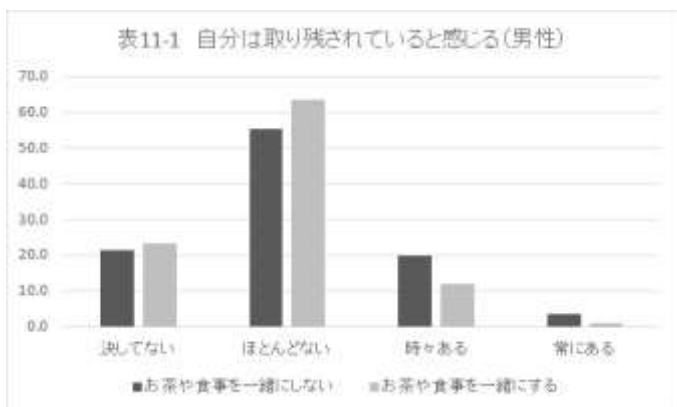
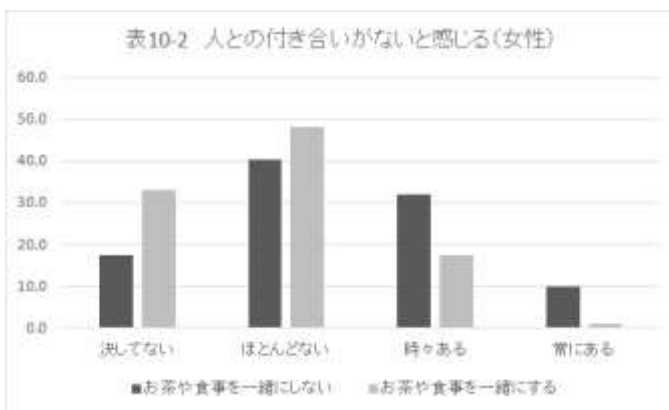
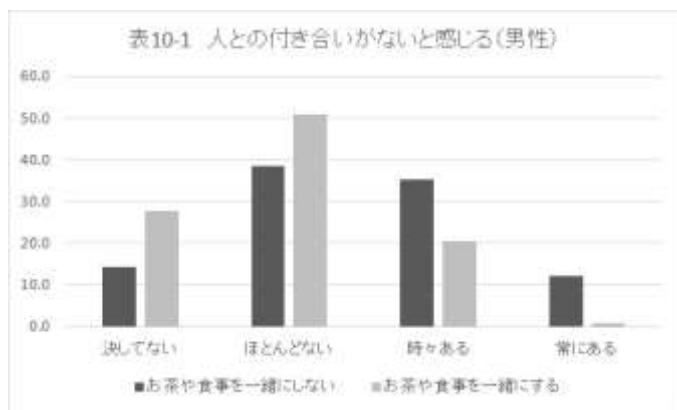


同様の分析を最もゆるやかな交流に位置付けられる近所と「会えば挨拶をする」で行った(表7-1～表9-2)。この結果、女性では「自分は取り残されていると感じることがある」「自分は他の人たちから孤立していると感じることがある」について、「会えば挨拶をする」人のほうが孤独感有意に低かった。男性ではいずれの項目についても有意な差は認められなかった。



加えて、代表的なコンパニオンシップである「お茶や食事を一緒にする」「趣味をともにする」についても検討を行った。この結果、近所と「お茶や食事を一緒にする」人のほうが、男女ともに孤立感は有意に低かった（表 10-1～表 12-2）。ただし「自分は取り残されていると感じることがある」については、有意な差が男性では認められなかった（表 11-1）。

「趣味をともにする」についても、「お茶や食事を一緒にする」と同様に、男女ともに近所と「趣味をともにする」人のほうが、孤立感も有意に低かった。



4. 「今の高齢者」にマッチした近所の付き合い方とは？

都市部に限らず地方都市においてもコミュニティの希薄化が指摘されるなかで、配偶者との関係で日常の社会関係が完結しがちな高齢の夫婦のみ世帯や、つながりをほとんどもたないひとり暮らし高齢者が増えていくことが危惧されている。この状況が進めば、孤立死・孤独死の増加のみならず、地域社会を崩壊させる事態も予測される。ここで改めて考えなければならないのは、近所や近隣と呼ばれる近場に住む人と人とのつながりのあり方といえる。現在の地域づくりにおいては一足飛びに、支え合いや助け合う関係性の構築が求められているが、現実的にそれは可能なものなのであろうか？まずはお互いに顔見知り

になり、ちょっとした困りごとを気軽に呟けるような関係性に発展させていくこと、この辺りからはじめていくのが本質といえるのではなからうか？

そこで本稿では、顔見知りになることで生まれるであろう「挨拶」、加えて困りごとをちょっと呟けるような「立ち話」に着目し、特に「外でちょっと立ち話をする」関係性について分析を行った。結果からは、挨拶する関係性から立ち話をするお付き合いに発展する女性に対し、近所で会った際に挨拶はしても気軽な世間話を求めている、無目的なおしゃべりを苦手とする男性の姿が浮かび上がってきた。

加えて、男女ともに「外でちょっと立ち話」をしている人の方が「趣味をともにしている」「お茶や食事を一緒にする」をしていた。女性の場合は、ご近所の顔見知りとの挨拶と立ち話から、相手を誘ったり・誘われることで活動や体験を共にする関係性に発展していることが考えられた。一方で男性の場合は、生涯学習やスポーツなどを共にするコンパニオンシップがあることで、近所で出会った際には、その活動などに関する立ち話をする機会が増えていることが予測された。

加えて本稿では、近所で「立ち話する」くらいの関係性でも孤独感を軽減する可能性が示された。サポートの授受といったある程度の密度濃い関係性の効果については既存研究で明らかにされてきたなかで、「立ち話」程度でもよいという本稿の分析結果は意味のある知見といえる。特に遠方に住む友人や元同僚などとの付き合いが中心の企業退職男性においては、外出行動半径の縮小に伴う孤立化を抑止する効果が考えられる。

今後は、高齢層でも交流手段としてのオンライン活用が一般化し、対面で会うことが難しくなっても、それらの手段で補完できることも予測される。しかし高齢期においては、リアルな接点の減少に伴い、オンラインは機能しなくなることが指摘されている。人生100年時代においては、距離的な制約の少ない近場に「あいさつ+α」、「立ち話する」位の関係性をもつことが大きなチカラになるともいえるのではなからうか。

さらに「外でちょっと立ち話」は、別の活動に誘われるキッカケや、ワクチン接種予約のできる医療機関を知るキッカケになったり、地域で安心安全に生活するための情報源とも位置付けられる。今後は、立ち話を誘引する過程が男女で異なるという事実を前提に、それらの他者を近所に増やしていくための働きかけを積極的に行っていくことが求められている。地域づくりや地域包括ケアシステムの構築に関わる公的機関や専門職には、助け合いや支え合いをいきなり目指すのではなく、「立ち話する」程度でも意味のあるという視点から地域支援に取り組むことも肝要である。